放眼日中

スリランカ　おじいさんの家に引き寄せられる中国人

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

1年半ぶりにスリランカを訪れた。バンコックからのフライトはなぜかどれも深夜に到着するものばかり。仕方なく1泊目はコロンボではなく、空港近くのネゴンボという街に泊まることにした。

何気なくネットで調べて予約したそのホテルは、ネゴンボの高級住宅地の中の普通の1軒屋であり、2階建ての上の階の2部屋のみを間貸しして、コテージと名乗っていた。午前2時過ぎに着いたにもかかわらず、丁寧に対応してもらい、心配は杞憂に終わった。翌朝も周囲では鳥のさえずりが聞こえ、目覚めは良かった。私のためだけに朝食が作られ、まるで友人の家にいるかのような感覚を持った。心からリラックスできる空間であった。

このコテージのことを聞きたいと思い、質問してみたが、「オーナーは足を手術しており、本日午後8時に戻ります。その際にお尋ねください」と言われてしまう。何となくこの辺は英国植民地時代を思わせる対応だったが、夜8時になると「オーナーがお会いしたいと言っています」と声を掛けられ、驚いた。

オーナーは老人で、今日手術した膝を見せながら「よく来てくれた。このコテージを開いて以来、私がお客さんをお迎えできなかった唯一の例外が君だった。本当に申し訳ない。でも会えて嬉しい」と心のこもった握手を交わした。筆者も夜中2時にやってきたのだから、文句などいえる筈もない。「うちはたった2部屋を貸すだけだが、それ以上増やしてもマネージ出来ないんだ」と言っていたが、正直、自らが入院していた時までも、お客のことを考えているこの老人に心打たれるものがあった。

5年前に家屋敷を売り払い、ここに越してきてコテージを始めたという。ちょうどスリランカの内戦が終わり、海外から観光客がやってくるタイミングに合っていた。お客は欧米人を中心に世界中からやってくるという。「最近は特に中国人が多いんだよ」と喜ばしそうに言う。今や世界中を旅している中国人、その全体的な評判は決して芳しくないのだが。

「うちに来る中国人は皆礼儀正しいし、静かだよ。若いカップルも多いし、新婚旅行で泊まる人たちもいる」と宿帳を見せてくれた。そこには英語と中国語でこの老夫妻への感謝の言葉が延々綴られており、驚くと同時に共感できるものが多かった。

老人は言う、「中国人も少し静かな所に来たいんだろう。ここに泊まると目を輝かせるよ」。確かに静かな環境に加えて、友人の家にいるようなホスピタリティー。朝食付きで日本のビジネスホテル以下の料金で泊まれるが、お金では買えない何かがある。居心地が良い、ということだけだろうか。

中国人、特に若者は一人っ子であり、実は家族関係が複雑で色々と悩んでいる人も多いと聞く。そんな中で何の制約もなく、手放しで歓迎してくれる居心地の良い場所。「キッチンで料理してもいいよ」との表示を見て、5つ星ホテルではなくこのような場所を間借りする彼らが求めている物が何か、スリランカのこの小さな、小さな家で見えてきたような気がした。